

4 「仏教を学ぶ」「仏法を聞く」ということは、「鏡を見る」に近い

仏法を聞いたときに「仏さまの教えはこんな教えなのか」と客観的に教えの内容を理解しただけでは、仏法を聞いたとは言えない。仏法とは、聞けば聞くほど自分の姿が見えてくる教え。

5 教えの鏡によって明らかにされる私たちの姿

自己中心的な生き方であったり、欲にまみれ、自分の思いを握りしめ、腹を立てたり憎んだり。つながりや関係の中で、互いに支え合いながら生きているにもかかわらず、そのことが分からないまま迷い続ける私の姿が照らし出されるから。ただそこに「罪悪深重煩惱熾盛の衆生」を「必ず救う」とお誓い下さった阿弥陀仏の本願のお目当ては当に私であった、救われなければ助からない私であったと気づかされる。

そして同時に、そのような私が、このときこの瞬間、生かされていることがただ事ではないのだと知らされてくる。私たちは既にして自分の思慮分別を超え、無量なるいのちによって生かされている。それはお念仏となって私たち一人一人に届けられている。

6 「二河白道の譬え」とは

この譬えは貪瞋(とんじん)二河の譬喩(ひゆ)ともいわれ、浄土往生を願う衆生が、信を得て浄土に至るまでを譬喩によって表したもの。

ある人が西に向かって独り進んで行くと、無人の原野に忽然(こつねん)として水・火の二河に出会う。火の河は南に、水の河は北に、河の幅はそれぞれわずかに百歩ほど(50~60メートル)であるが、



深く底なく、また南北に辺はない。ただ中間に一筋の白道があるばかりだが、幅四五寸(12センチ~15センチ)で水・火が常に押し寄せている。そこへ後方・南北より群賊・悪獣が殺そうと迫ってくる。

このように往くも還るも止まるも死を免れえない(三定死(さんじょうし))。しかし思い切って白道を進んで行こうと思った時、東の岸より「この道をたずねて行け」と勧める声(発遣)が、また西の岸より「直ちに來れ、我よく汝を護らん」と呼ぶ声(招喚)がする。

東岸の群賊たちは危険だから戻れと誘うが顧みず、一心に疑いなく進むと西岸に到達し、諸難を離れ善友(ぜんぬ)と相見えることができたという。

法語1 悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、
取ずべし、傷むべし
(親鸞『教行信証』「信巻」)